

# アメリカ陥落3

レジスタンス  
全米抵抗運動

大石英司

*Eiji Oishi*

## 立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～25頁までを収録したものです。

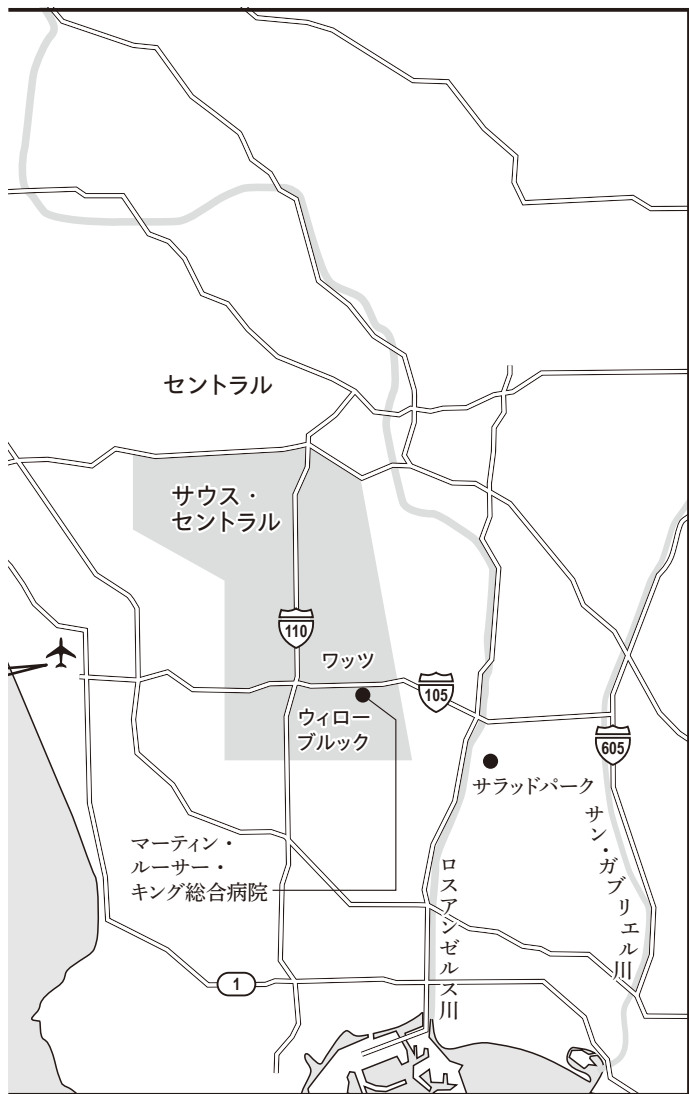
### ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶(次ページ)をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

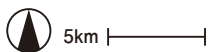
口絵・挿画  
地図  
平面惑星  
安田忠幸

## 目次

プロローグ	13
第一章 騒乱の後始末	21
第二章 マークスマン	41
第三章 LA暴動	67
第四章 レジエント	94
第五章 LAX	123
第六章 蘇った亡霊	154
第七章 ターミナルB	181
第八章 秘密	209
エピローグ	242



# ロスアンゼルス周辺

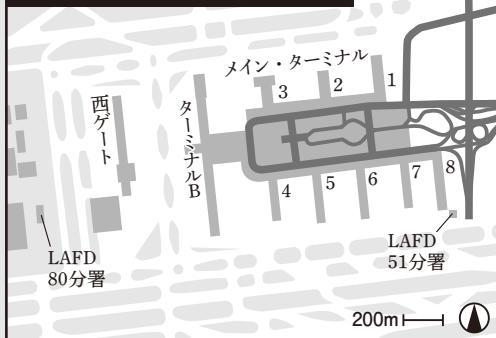


←至 ポイント・マグー海軍基地

1

サンタモニカ

## ロスアンゼルス国際空港



# 登場人物紹介

## //// [日本] //////////////////////////////////////

### ●陸上自衛隊

#### 《特殊部隊サイレント・コア》

ともんこうへい  
土門康平 陸将補。水陸機動団長。コードネーム：デナリ。

#### 《原田小隊》

はら だ たく み  
原田拓海 三佐。海自生徒隊卒、空自救難隊出身。コードネーム：ハンター。

はたけともゆき  
畑友之 曹長。分隊長。冬戦教からの復帰組。コードネーム：ファーム。

まち だ はる お  
待田晴郎 一曹。地図読みのプロ。コードネーム：ガル。

たぐちしんた  
田口芯太 二曹。部隊随一の狙撃手。コードネーム：リザード。

ひがひろみ  
比嘉博実 三曹。田口のスポッター。コードネーム：ヤンバル。

#### 《姜小隊》

かんあやか  
姜彩夏 二佐。元韓国陸軍参謀本部作戦二課に所属。コードネーム：ブラックバーン。

うるしばらたけとみ  
漆原武富 曹長。小隊ナンバー2。コードネーム：パレル。

ふくとめだん  
福留弾 一曹。分隊長。コードネーム：チェスト。

い い かける  
井伊翔 一曹。小隊のITエンジニア、通信担当。コードネーム：リベット。

あねこうじさねあつ  
姉小路実篤 二曹。父親はロシア関係のビジネス界の大家。コードネーム：ボーンズ。

にしかわしんすけ  
西川新介 二曹。種子島出身で、もとは西方普連所属。コードネーム：トッピー。

ゆらしんじ  
由良慎司 三曹。ワイヤー（西部方面普通科連隊）出身の狙撃兵。コードネーム：ニードル。

#### 《訓練小隊》

みねさやか  
峰沙也加 三曹。山登りとトライアスロンが特技。コードネーム：ケッター。

こまとりあや  
駒鳥綾 三曹。護身術に長ける。コードネーム：レスラー。

### 〈水陸機動団〉

しばひかる  
司馬光 一佐。水機団格闘技教官。

### 〈第3水陸機動連隊〉

ごとうまさのり  
後藤正典 一佐。連隊長。準備室長。

さめじまたくろう  
鮫島拓郎 二佐。第一中隊長。

さかさしんのすけ  
榊真之介 一尉。第二小隊長。

## ●航空自衛隊

### 〈第308飛行隊〉

あぎたつお  
阿木辰雄 二佐。飛行隊長。TACネーム：バットマン。

みやせあかね  
宮瀬茜 一尉。部隊紅一点のパイロット。TACネーム：コブラ。

## ●統合幕僚部

みむらかなえ  
三村香苗 一佐。統幕運用部付き。空自E-2C乗り。北米邦人救難  
指揮所の指揮を執る。

くらたよしき  
倉田良樹 二佐。統幕運用部。海自P-1乗り。

## ●在シアトル日本総領事館

どもんえりこ  
土門恵理子 二等書記官。

## ●ロスアンゼルス総領事館

ふじわらかねと  
藤原兼人 一等書記官。

## ////【アメリカ】////

### ●FBI

ニック・ジャレット 捜査官。行動分析課のベテラン・プロファイラー。

ルーシー・チャン 捜査官。行動分析課新人。

### ●ロス市警

カミーラ・オリバレス 巡査長。ヴァレー管区。

●テキサス州郡警察（ノーラン郡）

ヘンリー・アライ 巡査部長。

●“ナインティ・ナイン”

フレッド・マイヤーズ UCL Aの政治学准教授。通称“ミスター・バトラー”。

ジュリエット・モーガン 動画配信ストリーマー。通称“スキニー・スポッター”。

●レジスタンス

ルーカス・ブランク UCL A法学部政治哲学教授。かつての公民権運動の闘士。

リリー・ジャクソン 元陸軍大尉。ヘンリー・アライとは陸軍時代の同僚。

サラ・ルイス 海兵隊予備役中尉。スカウト・スナイパー指導教官課程出身。

ケイレブ・ジャクソン 無線マニアの少年。

//// [カナダ] ////

●カナダ国防軍・統合作戦司令部

アイコ・ルグラン 陸軍少佐。日本人の母を持ち、陸自の指揮幕僚過程修了。

イチロー・カワイ 陸軍軍曹。日系三世。

//// [中国] ////

●人民解放軍海軍

《東征艦隊》空母“福建”（八〇〇〇〇トン）

賀一智 海軍中將。艦隊司令官。

万通 海軍少將。参謀長。

顔昭林 海軍大佐。航空参謀。

杜柏霖 海軍大佐。情報参謀。

黄誠 海軍大佐。政治将校。



・ステルス艦上戦闘機 J-35 (殲 35)

林剛強 リンカンチイアン 海軍中佐。編隊長。TACネーム：老虎。ラオフー

陶紅 タオホン 海軍大尉。部隊最若手の女性パイロット。TACネーム：雪豹。シュエパオ

《海軍陸戦隊》075 型揚陸艦 “海南” ハイナン (四七〇〇〇トン)

楊孝賢 ヤンシャオシェン 海軍中佐。隊長。

張旭光 チャンシュウグアン 海軍大尉。小隊長。

## ●ロスアンゼルス中国総領事館

侯芸謀 ホウイーモウ 総領事。

蘇帥 スウシュエイ 二等書記官。

## ////【韓国】////

柳輝昭 ユフイソ 陸軍退役少将。

李承敏 リースンミン 陸軍大佐。参謀本部作戦課長。



アメリカ陥落3

全米抵抗運動<sup>レスジスタンス</sup>



## プロローグ

見渡す限りの荒野に、たった一台の車が止まっていた。

その辺りは、ほぼ三六〇度拓けており、遠くに、回り続ける風車の林立が見える程度だった。地表にしがみつく草木はどれも赤茶けて枯れており、視界を妨げる障害物は無かった。

テキサス州は、まるで焼き尽くされるかのよう  
に、灼熱の太陽に弄ばれていた。標高二〇〇〇フ  
イートを超えるスウィートウォーターのこの辺り  
でも、外気温は華氏一〇五度を超えていた。幸い、  
空気が乾燥していたので、どうにか耐えられるが、  
頭上からは強烈な太陽が、まるで狙い澄ましたか

のように照りつけていた。人間のみならず、あらゆる生命の存在を拒絶するかのようだった。

一人の刑事と二人のFBI捜査官が乗る、そのコンテナ型の民間救急車のハッチを開けたが最後、地獄に突き落とされそうな感じだった。

小さな窓に触ってみると、焼け付くような熱さ  
だった。FBI行動分析課の新米プロファイラ  
ー、ルーシー・チャン捜査官は、この車の外に出  
て、どのくらい歩く羽目になるのだろうかと不安に  
なった。まだしも、電気も携帯もないロスアンゼ  
ルスの方がましでは？　と思いつつあった。

救急車と言っても、サイレンはなく、設備も質

素だ。壁に輸液ポンプ用のフックと、床には、AEDがあるだけ。左右の壁側に、ベッドを兼ねる長椅子と、中央にストレッチャーが一つ。

運転席にいる青年は、医師だという話だったが、話しかけるな、詮索するなという条件が出ていた。

身長六フィート三インチもあるベテラン・プロファイラーのニック・ジャレット捜査官は、「確か、スウィートウォーターの西外れに、飛行場があったよな？」と、向かいの席に座るスウィートウォーター警察署のヘンリー・アライ巡査部長に尋ねた。

アライと、小柄なチャン捜査官二人分の体重で、ようやくジャレット捜査官一人と釣り合う感じだった。

「そうです。アベンジャー・フィールド。もともとは陸軍の飛行場で、大戦中は、陸軍最大の女性パイロット養成所としても有名でした。今でも小

型機が飛んできますよ。六〇〇〇フィート近い滑走路が二本もある。ただ、ジェットは飛べないですね」

「ここはそのアベンジャー・フィールドには見えないぞ？ アスファルト舗装はあちこち剥げ掛かっているし……」

「昔の、農薬散布用の滑走路です。衛星写真で見ても、ちよつとわからないでしょうね。この辺りには、似たような、昔、滑走路として使われていた農道滑走路が何カ所もあります」

「話せ——」

ジャレットは、命令口調で告げた。

「関係者の素性は詮索しないという約束で飛行機を手配しました」

とアライは拒絶した。

「退屈だ！ 退屈さの余りに、このドアを開け放ち、外に飛び出しそうだぞ。なあチャン捜査官？」

「はい！ 同感です。このエアコンの冷えた空気を失いたくはない」

とアライ刑事の隣に座るチャンが言った。

アライ刑事は、洪々という雰囲気で喋り始めた。「リリー・ジャクソン元陸軍中尉……。彼女は黒人で、レズビアンです。僕の、陸軍時代の同僚です。車両部隊にいたのですが、僕は大学進学の手費を稼ぐため。彼女は、通信制の大学に通いながら、なおかつ軍のパイロットも目指していた。當時はもう、軍隊は同性愛にそこそ寛容な姿勢を示していて、彼女もそれを隠そうとはしなかった。とにかく、努力家でした。僕が寝た後まで勉強し、起きた時にはもう何かのテキストを開いていた。場所がどこだろうと。卒業資格を得ると同時に士官学校へ。陸軍航空隊への入校も許され、僕が軍を辞めた直後、汎用ヘリのパイロットになったと軍仲間から聞きました。民間のエアラインで大型

機を飛ばしたいと言っていたので、てつきりそっちへ行ったんだと思っていました。

去年、ダラスで警官向けの講習会があり、僕は一週間、ここを留守にしました。週明け、署に顔を出すと、留置場に彼女がいた。驚きの再会でした。何をやらかしたのか本人に聞こうとしたら、ダラスから有名事務所の弁護士がやってきて、さっさと保釈金を払って彼女を連れ去った。僕は名刺を渡すのが精一杯だった。

署で聞いた話では、一般市民からのタレコミがあり、不審な小型機が、今は使われていない農道滑走路に着陸してくる。麻薬でも運んでいるんじゃないか？ と。それで、麻薬取締局<sup>A</sup>と協力して、着陸してきた所を押さえたいらしい。機内から、大麻の樹脂のブロックが出て来て、合法化された後とは言え、それは許可業者の話ですから、当然逮捕され、留置場で一晚過ごしたということらしい。

ところが、これも変な話で、大麻を運びたければ、今時は宅配すれば済む。わざわざ飛行機を飛ばすような利益は出ない。それに、ダラスから来た弁護士というのが、民主党系の大手事務所からで、密売人レベルで雇えるようなお安い弁護士でも無かった。そこは、いわゆる公共貢献案件も手広く扱ってますけどね」

「配管工ネットワークだな」とジャレットがつぶやいた。

「一週間後くらいかな。彼女から短いメールが来た。『思っていた人生とは違うけれど、今の自分の仕事には誇りを持っている……』みたいな内容でした。それ以上、詮索はしなかった。で、僕は昔のよしみもあったので、比較的安全な滑走路、ちよつと危険度が高そうな滑走路は避けるようにと、何力所か教えてあげました。今回は、その大手弁護士事務所経由で依頼した。向こうはもう携

帯も繋がらないはずなのに、なぜか連絡が付いたらしい」

「なんですか？ プラマー・ネットワークって」とチャンが聞いた。

「ブラミングだよ。人と人を繋いで脱走させる。ベトナム戦争時代からの、わが国の伝統だな。もつとも、ウォーターゲート事件で揉み消し工作に当たった連中の方が有名になってしまったが。中絶希望者を、中絶医療が可能な州まで運ぶんだ。カリフォルニア州なんて、そういう脱走ネットワークに、堂々と補助金まで出しているんだぞ。当然、ここテキサスでは中絶は違法だから、大方、カリフォルニアにでも運ぶんだろう。中絶反対派は、クリニックを爆破するくらいのはしでかすから、何事も秘密裏に動く必要がある」

「ニックは、共和党員でしたよね？」

とアライがやんわりと聞いた。



「だが、原理主義者ではない。私はプロファイラーとして、宗教的に非常に厳格な家庭で育った人間が、シリアル・キラーになるケースを何件も見てきた。だから、そこまで厳格にするのはどうかと思っている。君ら二人とも民主党員だから白状するが、そんなのは、女性の、当人の権利だ。大麻を積んでいたのは、カムフラージュだな。微罪で逮捕はされるが、当局からそれ以上突っ込まれる心配はない。チクツたのはたぶん、それを見張っていた中絶反対グループだろう」

アライは、同意する印に軽く頷いた。

運転席で無線機が反応し、飛行機が降りてくると報された。

しばらくして、双発の小型プロペラ機が降りてきた。パイパー・セミノールは、アメリカではごくありふれた双発プロペラ機だった。

滑走路の端まで走った後、さらに一八〇度向き

を替え、エンジンをいったんシャットダウンした。止まっていた救急車のエンジンが入り、機体のそばまで走る。

二〇メートルほど離れて止まると、運転手が降りてきて後ろからドアを開け放った。その瞬間、熱気が襲ってくる。

ストレッチャーターを降ろし、機体のそばへと寄せた。客が乗っていた。ぐったりしている様子だった。しかも、坊主頭の女の子二人だった。一人は一五、六歳。だがもう一人は一〇歳になるかどうかだろう。二人とも白人。そして、付き添いの女性看護師はアジア系。

飛行機姿のリリー・ジャクソンが降りてきて、患者が降りるのを手伝った。チャンは、その二人の病人の容貌にショックを受けた様子で、一瞬、表情が固まった。

二人とも、まるで骨と皮だった。すでに眉毛も

無く、素肌は透き通るように白い。血の気が無い感じだった。どうかすると、肝臓をやられているみたいに黄疸おうだんが出ているようにも見える。きつい化学療法の中であることは一目瞭然だった。

一〇歳前後の女の子は、すでに歩く体力もなく、輸液のチューブが付いたまま、リリーに抱きかかえられて、ストレッチャーに乗せられた。

「すまない、リリー。無理を頼んで！」

「いいのよ。どうせ帰りは空荷だから。早く乗せてあげて！ この熱気は辛いわよ」

「ミラクル7に伝えてくれ。こちらの受け入れ態勢がそろそろ限界にきていると。電気はまだあるが、薬が底を突きつつある。できれば、今後の受け入れに関しては、一緒にそれなりの量の薬も遣よこしてほしいと。全米中から、重症患者が押し寄せてくる」

運転手が少女のバイタルをチェックしながらリ

リーに話しかけた。

「わかつているわ。でもあっちももう大病院の自家発電が尽きそうなの。薬のことは、優先度が高いものから連絡して下さい。さあ、お客はさっさと乗って！」

一番小柄なチャン捜査官をコクピットに座らせた。ジャレットとアライは後部座席に着く。

「リリー、去年は指輪をしていたはずだが？」

「ヘンリー、いきなりそれ？ 同性愛者の結婚はなかなか上手くいかないのよ」

「これは、君の機体なの？」

「いいえ。ある篤志家が、とある団体に寄付してくれた。私はその専属パイロット。この機体の燃料代は、実は州政府から出ているけれど、それでも、法執行機関の人間を乗せる日が来るなんてね……」

看護師も乗せた救急車が出発するのを見守る。

「あつちはどんな状況なのかね？」

とジャレットが聞いた。

「郊外の飛行クラブはどこも大忙しですよ。カリフォルニアから脱出する金持ちを乗せた機体がひっきりなしに飛び立っていく。直に飛行場の燃料も尽きるでしょうが」

「どこへ逃げるんだね？ ここテキサスは、避難民の受け入れを拒否しているし」

「ここも降りる場所はどこでもあるし、たとえばコロラド州みたいな、西海岸から近くて、人口も少なそうな所ですね。自分もつばら、小児癌患者を州外に移送する任務に当たっていますが。まだ安全な州、受け入れ余力がありそうな都市の情報が出回っています」

「ネットもダウンしているのにどうやって？」

とチャンが聞くと、リリーはフツツと笑いながら、エンジンを始動した。

大統領選挙の有効性を巡る各州の大陪審判決に端を発した暴動は、全国に波及し、ワシントンD Cは暴徒鎮圧の催涙ガスが充満し、政府職員は官庁街を脱出。ホワイトハウスに立て籠もる大統領は、英国軍海兵隊に守られる有様だった。真っ白だった議会議事堂も、すでに炎上し、今は真っ黒に燻くすぶっていた。

全土の主要都市で大停電が起こり、暴動の規模が最も大きかったニューヨーク、マンハッタン島は略奪の街と化し、市民が我先にと脱出を争っていた。島外へと出るトンネルも、橋も焼け落ち、その炎はまだ燻くすぶっている。

ロシア人傭兵集団が仕掛けた山火事も全土で発生し、高温乾燥が続く北米の山々を燃え上がらせていた。

NATO軍部隊は、党派対立に巻き込まれて出

動が禁じられたアメリカ軍に代わり、全米の主要都市で活動し、治安維持や自国民保護に当たっていた。

四〇万人もの在留邦人を抱える日本もまた、訓練中の部隊や、新たに派遣された部隊で、邦人保護任務を開始していた。だが、テキサスなどごく僅かな州を除き、全米の電力も、もちろんインターネット網もダウンし、邦人がどこでどんな避難生活を耐え忍んでいるのかすら不明だった。

アメリカは、国家としての統治機能を喪失し、無法地帯が少しずつ拡大し、ディストピア化しようとしていた。外からの軍事侵略ではなく、内側の対立で破滅しようとしていた。

## 第一章 騷乱の後始末

アメリカ合衆国北西部ワシントン州は、カナダ国境に隣接する。人口のほとんどは、北西部の、ピュージェット湾沿いのシアトルを中心としたIT革命で発展したエリアに暮らしている。レーニア山を擁するカスケード山脈の東側にはコロンビア盆地が広がる。盆地の西側は、ほとんど何もない。陸軍のヤキマ演習場と、夏の過ごしやすさを活かした既舎経営。だが東側には、広大なプランテーションが広がる。

西海岸から三〇〇キロ内陸部に入った人口八千人余りのクインシーという町に関して、昨日まで、その存在を誰も知らなかった。とりわけ日本人に

は全く馴染みのない町だった。

南西には、ヤキマ演習場があり、そこは自衛隊関係者には知られていたし、南東には、モーゼスレイクという航空機用のテスト・フィールドがあり、これは航空業界の関係者には知られていたが、クインシーは、どこかの都市と都市を結ぶ中継地点というわけでもなく、ただプランテーションが広がるだけの小さな町だった。

この町を暴徒から死守するよう命令が下った時点ですら、派遣される部隊の隊員らは誰も、そこに何があるのか、何を守るべきなのか全く知識を持ち合わせていなかった。

クインシーには、GAFAMはもとより、日本の名だたるIT企業も巨大なデータ・センターを持っていた。安定した電力供給と、サーバーを冷やすための水が豊富だったからだ。そして、トップ・シークレットだったが、アメリカ国家安全保障局<sup>A</sup>が、それらGAFAMと契約し、NSAが収拾したデータの全てをそれらの施設に預けてもいた。

あらゆる意味で、クインシーは、アメリカのIT社会の心臓部であり、国家の生命線だった。しかし、NSAの存在は極秘であり、そこを守る部隊も存在せず、僅かに配置されたNSAの保守チームは、ドローンを自在に操る地元高校生らの協力も得て、ヤキマから自衛隊部隊が駆けつけるまで持ち堪えた。

最後には、中国海軍正規空母を飛び立った戦闘機による対地ミサイルの攻撃もあったが、それも

どうにか躲<sup>か</sup>した。

セル<sup>グ</sup>もしくは99パーセント<sup>グ</sup>を名乗る暴徒らは、津波のような大群となって町を襲ったが、間一髪で自衛隊部隊が間に合った。そして最後は、飛来したB・2ステルス爆撃機が、雨あられと誘導爆弾を投下し、数千名もの暴徒を薙ぎ払い、夜通し続いた攻防は決着した。

断水し、停電が続いていることを除けば、クインシーは、いつものクインシーだった。住民のほとんどは、整然と区画整理された住宅街で一晩を耐え凌いだ。ロシア人の傭兵集団が放火して回ったが、消防隊は殉職者を出しつつも必死の消火活動で延焼を防いだ。

町を守って戦った自衛隊側にも戦死者が出ていた。それも三名も。襲撃者グループは、それなりに組織化され、重機関銃まで持っていた。何より、自衛隊を恐怖させたのは、彼らが死を恐れていな

かったことだった。

一部は明らかに薬物をやっていたが、一部は、自分らの負け犬人生を終わりにしたがっているようにすら見えた。自暴自棄な攻撃に、こちらも犠牲を払わざるを得なかった。

陸上自衛隊、在留邦人救難任務部隊はクインシーの町の南西角にある教会前の駐車場に陣取っていた。日系人神父がいる教会には、日本や韓国、台湾から派遣された駐在員らが避難していたが、全員が、陸自のオスプレイ二機で、ひとまずヤキマへと運ばれた。そこからは、各国の民航機で脱出する手筈になっている。

だが、中国の空母艦載機がカスケード山脈上空で自衛隊機と交戦状態に入ったことから、その作戦もすんなりとは進んでいなかった。その前夜、シアトル沖で、解放軍戦闘機による露骨な脅しを自衛隊機が受けたことから、中国政府に対して、

民航機の安全を保証せよ、という声明がアメリカ政府を含む関係各国から出されていたが、中国政府からの応答はなく、逆に、中国同胞のアメリカ脱出を妨害するな、という抗議が出ていた。

現状では、自分たちの手で、航空路の安全を確保するしか無かった。

第一空挺団・第四〇三本部管理中隊付き、その実、特殊作戦群特殊部隊、サイレント・コアの指揮を取る土門康平どもんこうへい陸将補は、指揮車両、メグとライフサポート車両、ジョーを並べた間に張ったタープの下にいた。

教会のすぐ外では、ラウンドアバウトの十字路を封鎖した尖塔の一部撤去作業が始まっていた。鐘が鳴っていた教会の尖塔を、JASSM・ER巡航ミサイルで制御崩壊させ、敵が突っ込んでくる道路を封鎖したのだった。

けが人に乗せた暴徒の車がひっきりなしに入っ

てくる。すぐ近くに大きな病院があつた。彼らは、教会から五〇〇メートル手前の州兵のバリケードでいったん止められ、武装解除に応じたものだけが、通行を許されていた。

「メグ & ジョー」二台の指揮車両自体がすでにカムフラージュ・ネットで隠されている。上空三〇〇メートルをドローンが飛んでもわからないほど、巧みな偽装だつた。

そのネットの下で、車体に貼り付けた太陽光パネルが、そこそこの電力も生産していた。今は、日本企業が過去に教会に寄付したらしい太陽光パネルの電力も貰っていた。

標高四〇〇メートル、気温は高い。爆撃による影響で、あちこち道路が寸断され、ここまでやってくる暴徒ももういなかった。

何より、隣の州から派遣された州兵一個中隊がようやく到着し、自衛隊は任務から解放されつつ

あつた。

土門は、部隊のナンバー2、小隊長の姜彩夏<sup>かんあやか</sup>二佐が携帯用ホワイトボードに書き出した進行表を一瞥した。

「ここからの邦人避難はオスプレイ二機による二回のフライトでようやく完了。仲間の遺体も一緒に運び出せた……。残念ながら、肝心のヤキマシアトルからの民航機の離陸許可はまだ出ない。それで、どうせ中国が色よい返事はしないだろうという前提で、航空自衛隊が、空中早期警戒管制<sup>A</sup>指揮機<sup>S</sup>と、戦闘機部隊を出すぞうだ。エルメンドルフに向かうのか、それともワシントン州に展開するのはまだ聞いていない。これで、味方のヘリ空母部隊も少しは楽になるだろうし、ロシアが手出ししてこなければ、民航機は、アリュウシヤン列島沿いに日本まで辿り着ける。」

次に、戦死者と重傷者の件だが……」



と土門は、もう一個小隊を預かる原田拓海<sup>はらだたくみ</sup>三佐に振った。

「はい。残念ながら戦死者三名、重傷五名です。他に、後送の必要は無いものの、手当が必要となつた負傷者が十数名です」

「重傷者は大丈夫なの？」

「現状では、生命に危険が及ぶレベルの負傷ではありません。腕や足をやられました、切断まではいかずに済むでしょう。ただし、治療を終えて復帰しても、現場部隊への復職が可能かどうかは不明です」

「ご遺族への連絡の手筈は？」

とパイプ椅子に腰を下ろす第3水陸機動連隊の面々に質した。最前列に座る連隊長の後藤正典<sup>ごとうまさのり</sup>一佐が身を乗り出した。

もとはと言えば、編成中の一個中隊が、ヤキマで訓練中のところを、周辺地域の治安維持に駆り

出されたことが発端だった。

「水機団本部で、全て対処してもらいます。日本時間は今深夜。ここでの戦闘は、外報を含めて、まだいっさい、いかなるニュースにもなっておりません。日本時間の明日、ご遺族に報せがいきます。訓練中の事故という形にするか、それともここでの戦死という形にするかは、防衛省が考えるでしょう。答えはまだ聞いていません。各小隊長と、十分な時間を取って一人一人と話しました。

士気は旺盛です！ 想定した戦場と敵でもありませんが、われわれはまだ十分戦えます」

「ざっくり言って一個小隊分の隊員がいなくなつたわけだが、一個小隊分解して、各小隊に隊員を割り当てる必要はないかな？」

「そのことも、合わせて話し合いました。最大で一名戦死、二名脱落の小隊には、無傷な部隊から人員を補充します。他は大丈夫そうです。戦死

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。